道命阿闍梨と恋歌：好色説話の周辺 (上)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柏木, 由夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6178

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大妻国文　第47号　二〇一六年三月

道命阿闍梨と恋歌――好色説話の周辺――（上）

柏木由夫

はじめに

道命阿闍梨（九七四―一〇二〇）は、『蜻蛉日記』作者の孫であり、十代半ばまでに比叡山で出家するが、花山院に親近して亡き院への哀傷歌を多く残す一方、和泉式部との艶聞が説話化されるなど同時代歌人との関わりも注意される。道命については、すでに三保サト子氏を中心としたいくつもの論考によって研究が積み重ねられているが、[1]それらの研究成果の上に立ちつつ、なお指摘が十分にされていないと思われる道命歌の世界について以下で述べたい。

1

まず初めに説話世界での道命から見ることとする。その点では、すでに示した山下正治氏の論文（注1の⑧）がある。山下氏は『法華験記』『今昔物語集』『古事談』『宇治拾遺物語』『雑談集』での道命に関する説話の差を論じ、まじめな法

華持経者が、『古事談』以後、好色僧・破戒僧とされたと述べられる。以下でなお見直したい。まず『宇治拾遺物語』（巻一ノ一）では、

道命於和泉式部の許に読経し五条道祖神聴聞事

今はむかし、道命阿闍梨とて、傅殿の子に、色にふけりたる僧ありけり。和泉式部に通ひけり。経を目出たく読みけり。それが和泉式部がり行きて臥したりけるに、めざめて、経を心をすまして読みける程に、八巻読みはてて、暁にまどろまんとする程、人のけはひのしければ、「あれはたれぞ」と問ひければ、「おのれは五条西洞院の辺に候ふ翁に候」と答へければ、「こはなに事ぞ」と道命いひければ、「此の御経をこよひ承りぬる事の、生々世々、忘れがたく候」といひければ、……以下略

と、好色僧で和泉式部と通じていたことと合わせ、読経での美声が道祖神をも引き寄せ魅了するほどだったとされている。それは以下のようにすでに『古事談』（巻第三　三五）にも同様に載っている話でもある。

道命阿闍梨は、道綱卿の息なり、其の声微妙にして、読経の時、聞く人皆な道心を発す、と云々。但し好色無双の人なり。和泉式部に通ふ時、或る夜式部の許に往きて会合の後、暁更に目を覚まして、両三巻を読了して後、まどろみたる夢に、はしの方に老翁有り。「誰人ぞや」と相尋ぬる処、翁云はく、「……以下略

これらに対し、『今昔物語集』（巻第十二　天王寺別当道命阿闍梨語第卅六）での道命には法華経読誦の素晴らしさは繰り返し語られるが、好色という面は描かれていない。しかし、その中でも

凡ソ、経ノミニ非ズ、物云フ事ゾ、極テ興有リテ可咲カリケル。中宮ニ阿闍梨ノ参リタリケルニ、女房ノ問ヒケル様、「引ク経ニハ何クカ貴クハ有ル」ト。阿闍梨、「琵琶・饒・銅バチト云フ所コソ引クニハ貴ケレ」ト荅ヘケレバ、女房イミジウ咲ヒケリ。

とある部分などは道命らしいと言える。つまり、読経での発声法に関する「引ク経」という言葉への女房の質問を琵琶などの楽器のことに取り違えて答えて笑いを取ったというのである。この箇所に続く別の話の末尾も、「其ノ座ニ有リト有ル人、頤ヲ放チテゾ咲ヒケル」と結ばれている。また、説話末尾近くでは、道命が死後にある人の夢に現れ、「我レ、生キタリシ時、三業ヲ調ヘズ、五戒ヲ持タズシテ、心ニ任セテ罪ヲ造レリキ」と語ったとされる。ここにも単に教理教義を生真面目に説く仏教者ではない道命らしさが示されていると言えるだろう。

道命の研究論文冒頭に掲げた上村悦子氏の論（注1の①）ですでに道命の和歌は、「縁語・掛詞を自由自在に駆使した知巧的かつ洒脱闊達な機智を弄した諧謔の歌が多い。……」と述べられているが、道命の特色として「自由」・「洒脱闊達」・「諧謔」との語はほぼ的を射た評と言えるだろう。そして、和泉式部との艶聞にも実はそれらは関わっているのではないだろうか。『古今著聞集』（三一八）の説話がそうしたことを思わせる。

道命阿闍梨歌を以て和泉式部に答ふる事

道命あざりと和泉式部と、ひとつ車にて物へ行きけるに、道命うしろ向きてゐたりけるを、和泉式部「などかくはゐたるぞ」といひければ、

よしやよし向かじや向かじいが栗のえみもあひなば落ちもこそすれ

和歌の「向かじ」は後ろ向きから正面向きにはならないとの意に「いが栗」を「剥かない」を懸け、「えみもあひ」とは、笑い顔になることと栗が熟して割れることを懸けるとされる。[2] つまり、道命歌は、二人が顔を合わせて笑ったら車から落ちてしまうのが困るので後ろ向きでいるのだとの内容を、いが栗を剥かないことに重ねて詠んだ歌で、諧謔味主体の歌である。ここに見るように、好色と諧謔性とは無縁ではないのではないかと思う。

説話は後代のもので間接的なものと言わざるを得ない。より直接的なものとして、同時代資料での道命の和歌贈答を見たい。

道命あざり、はじかみのはなをおこすとて

花のみなちりてののちにからくしてのこれるもののははじかみのはな　（頼宗集・六三）

かへし

きみはさはからきはなをぞこのみける世のすきものとおもひけるかな　（同・六四）

「はじかみ」はサンショウ、あるいはショウガとされる。道命歌の「からくして」には、「やっとのことで」の意に「はじかみ」の縁で「辛くして」が懸けられている。頼宗の返歌では、「辛き」の縁で「酸（す）き」（酸っぱい）を言い、それに懸けて「世の好き者」と道命を揶揄している。好き者はからかいの対象であり、諧謔と結びつく。

2

道命に関する評価を考えさせる資料として、次の『梁塵秘抄』の記述がある。

和歌にすぐれてめでたきは、人丸赤人小野の小町、躬恒貫之壬生の忠岑、遍昭道命和泉式部。

ここに見られる歌人には、かなりの偏りがあると評すべきだが、『梁塵秘抄』にとっての平安時代前半における代表歌人を挙げたと考えるべきなのだろう。その中に道命も入っていることは注目される。人丸以下三人ごとにひとまとまりとなっているところから、道命は遍昭・和泉式部と一グループを成していると見られる。ここでは、まず遍昭と道命との関わりを考えたい。遍昭歌について見れば、前段で示した上村氏の指摘する道命の特色の「自由」・「洒脱闊達」・「諧謔」という点が、そのまま遍昭歌の特色について言えることでもある。(3)

しがよりかへりけるをうなどもの花山にいりてふぢの花のもとにたちよりてかへりけるに、よみておくりける

①よそに見て帰らむ人に藤の花はひまつはれよ枝はをるとも　（古今集・春下・一一九）

題しらず

②名にめでてをれるばかりぞをみなへし我おちにきと人に語るな　（同・秋上・二二六）

（題しらず）

③秋ののになまめきたてるをみなへしあなかしかまし花も一時　（同・雑体・一〇一六）

房の前栽見に女どもまうできたりければ

④ここにしも何匂ふらん女郎花人の物言ひさがにくきよに

（拾遺集・雑秋・一〇九八）

右に遍昭歌を四首挙げたが、①では訪れた女達を引き留める手段として蔓性の藤に「はひまつはれよ」と命じたもので、若干露骨さもあるが肩肘張らない諧謔味を感じさせる。②③④の女郎花には男を惹きつける魅力ある女性がイメージされていて、イメージ自体が格別個性的というのではないが、遍昭の場合は根本が仏教者でありながら、その堅苦しさを払拭しようと俗に接しつつ、なお洒脱な味わいの諧謔性があると言えるだろう。

これらに近いものを『道命集』の中から抜き出せば次のようなものが挙げられる。

くらまにまうでたりしに、あつのぶまであひて、よひとよおこのふこゑし侍りしつとめてやりし

⑤名にたかきくらまの山をきてみればのりとどめたるところなりけり（二四）

けいものあるをおにのかたにつくりて人にみすれば、をとこになしてかくかきつけたり

⑥恐ろしきもののさまかな我はなほこれがいもにはならじとぞおもふ

かへし

怖ぢつつむ深きちぎりのありければ君が男になせりとぞみる

とてやりたれば、又法師になしてかくかきたり

とてやよきかくてやよきと見れどなほ宿世つたなきもののさまかな

又返し

いかばかり御園の辛くありしかば芋が頭をそれるなるらん（一七七～一八〇）

まだ寝ぬ人にやらん、歌よみてとせめしかば、子の日のこころを

⑦けふもけふねのびの松はひきつれどまだねをみぬぞかひなかりける（二三九）

ところの、木のえだのやうにて一尺ばかりなるを、人のもとに

⑧音にきく高麗もろこしは広くともかかるところはあらじとぞおもふ（二四二）

まず⑤だが、仏道修行の地である「鞍馬」の地名を乗馬という点から、「乗り」の意を懸け仏法「法（のり）」を詠んだ。同様の技法は他に一例、

鞍馬とぞのりを越えぬる山近く時雨るる空の名にこそありけれ　（御形宣旨集・三）

があるが、軽妙な歌いぶりが覗える。

次に⑥の四首を見る。まず、道命が鬚根の生えた芋を恐ろしげな鬼の形相に削って相手（女性か）に見せたところ、相手はそんな恐ろしい者の妻はお断りと返答するが、道命はなお、そんな怖がるほど深い縁があるので貴女の連れ合いと見たのだと迫る。相手は芋の鬚根をすっかり抜き剃髪後の僧のようにして、芋を俗世での運がない者だと退ける。しかし、道命は育った畑で辛い目にあったのか、と相手の拒否をはぐらかす。道命とその相手との丁々発止のまさに軽妙洒脱な応酬と言えるだろう。

⑦は、共寝をしていない相手に送る歌の代作を依頼されての歌で、子（ね）の日に松を引くことができても寝（ね）られないのは甲斐がないとの内容。男女間のことをかなり露骨に詠んでいる。相手に送ったとは思えないほど、諧謔にしても品がない。⑧は巨大な「ところ（野老＝ヤマイモの一種）」について、「高麗もろこし」の国土と比べて、その大きさをいうのに「所」を懸けて軽妙に詠んでいる。これらは歌の品格という点で道命は遍昭に劣るかとの印象があるが、道命歌の諧謔性をよく示しているものと考える。

以上、二人の和歌世界の近さをみたが、単に客観的に近いと言うだけでなく、道命が遍昭を先人として意識していたとも考えられる。それは『道命集』の

山寺に侍りしころ
世をそむくところとききておく山は物おもふにぞいるべかりける（二六）
をば、うせたまへりしころ
おくれたるわが身を嘆くをりをりにさきだつものはなみだなりけり（一一五）

の二首が、遍昭歌の、

世をそむく苔の衣はただ一重かさねばうとしいざ二人ねん（後撰集・雑三・一一九六）
末の露下の雫や世の中の遅れ先立つためしなるらん（新古今集・哀傷・七五七）

にそれぞれ拠ったものと思われるからである。

3

次に『梁塵秘抄』が遍昭とともに挙げるもう一人の和泉式部と道命について見ていきたい。しかし、二人については説話でも強調され、実際に同時代の歌人として深い関わりがあった間柄と思われるが、二人が交わした贈答歌は確認できない。二人の接点として確認できるのは、和泉式部が花山院周辺歌人の一人であること。あるいは『道命集』九六～一〇〇及び二九五は、『平安朝歌合大成』による〈歌合一一三〉『「寛弘四―七年」冬傅大納言道綱歌合』とされ、その歌題は、

神祭・千鳥・霰・月で、『和泉式部集続集』三二五〜三三一にも「雪・氷・冬山・神祭・千鳥・霰・水鳥」の題による連作があり、和泉式部も同じ歌合に参加したとされること（注1の⑦）。その他には、和泉式部が再婚した藤原保昌について、『道命集』に「やすまさきたるに」（二三八）とあって、道命が保昌に歌を送っていることがあるのみである。

しかし、二人の歌をつぶさに見ると、表現面で他の歌人達に比べて格段の重なりが指摘できる。それは、どちらがどちらに影響を与えたか、あるいは一方的でなく双方向的なものかは不明だが、道命歌の重要な一面として位置付けるべきと思うのである。以下に、道命歌を軸にして、それらの一部を掲げたい。

子の日、まつのをにて、人人あまたくだりしに

①ひきつれてけふは子の日をしつるかなまつのを山のねをたづねつつ　（道命集・二三）

引き連れて今日は子の日の松にまたいま千年をぞのべに出でつる　（後拾遺集・春上・二五・和泉式部）

［侍る山寺にまかりかへりたるに、花のみなちりにけるをみてよみ侍りける］

②心うくをしみし花はちりはへてなどいとふみのひさしかるらん　（道命集・一九五）

おぼろけにをしみし花は散りにけり枝にさへこそめはとまりけれ　（和泉式部集・二一二）

世の中にあやしき物は厭ふ身のあらじと思ふに惜しきなりけり　（同・三四六）

あすこむといひたる人の、雨のいたうふれば見えぬにいひやる

③曇らずはおぼろけにてはと思ふべしこは雨ゆゑにさはるものかは　（道命集・一九七）

よべは雨のいたう降りしかば行かずなりにし、と言ひたりし人に

人ならば言ふべきものを待つほどに雨降るとては障るものかは　（和泉式部続集・四二六）

正月七日はるのたつとし、人のもとにわかなたてまつるに

④いつしかもきみにとおもへば春霞たつやおそきとわかなをぞつむ　（道命集・二一八）

春霞たつやおそきと山川の岩間をくゝる音聞こゆなり　（後拾遺集・春上・一三・和泉式部）

これら①～④は、特に重なりが大きく、説明を必要としないほど一目で両者の関わりの強さが確認される。以下には、他の歌人の和歌とも重なりが見られ、それらからの摂取も想定されるが、なお和泉式部との関わりの深さが推測されるものを挙げる。

やまでらにこもりて、人のもとにやり侍りし

⑤日にそへておぼつかなさのまさるかなあひみえし日や遠ざかるらん　（道命集・二七）

日にそへて憂きことのみもまさるかな暮れてはやがて明けずもあらなん　（後拾遺集・恋四・八〇六・源高明、和泉式部集・五四六）

つげそめし思ひを空にかすめてもおぼつかなさのなほまさるかな　（元良親王集・一二八）

ながめやる山辺はいとど霞みつつおぼつかなさのまさる春かな　（拾遺集・恋三・八一七・藤原清正女）

をば、うせたまへりしころ

⑥おくれたるわが身を嘆くをりをりに先だつものはなみだなりけり　（道命集・一一五）

悲しきはおくれて嘆く身なりけり涙の先にたちなましかば　（和泉式部続集・七三）

末の露下の雫や世の中の遅れ先立つためしなるらん　（新古今集・哀傷・七五七・遍昭）

心にはそむかんとしも思はねど先立つものは涙なりけり　（清少納言集・三八）

秋、山寺にまかりこもりて、しばしありて人に

⑦秋風のはげしき山にいりしよりあゆぶくさばにつけてかなしも　（道命集・一一六）

消えぬべき露の我身は物のみぞあゆぶ草葉に悲しかりける　（和泉式部集・八八六）

手にならす扇の風を添へたらばあゆく草葉につけて忘るな　（赤染衛門集・六〇六）

例えば⑤では道命歌の二三句とほとんど重なるが空模様中心の二首に対し、和泉式部歌のみが日の進行を問題視していることで道命との関係深さを見ることが出来る。⑥では、遍昭歌を出発とするが、道命歌と清少納言歌の下句が一致するものの、上句まで含めればやはり和泉式部歌の方が関わり深いと見なされよう。⑦は「あゆぶ」「あゆく」という語義不明瞭な語を含み[4]、道命歌が和泉式部歌と赤染衛門歌のどちらかのみと関わったと言うのは難しく、むしろ「悲し」の重なりから和泉式部歌と無縁とすることはできないと言うに止めるべきだろう。

こうした実作上の関わりこそが道命と和泉式部について検証できる接点である。この二人の和歌表現が多く重なること自体が小さくない意味を持つと考えられる。一方、特に説話での二人について艶聞こそが強調されているのは、和泉式部の恋多き女という評判に因るところも大きいだろう。だがそれ以上に、道命自身の好色性や諧謔性が大きいと思われる。説話中の道命は、読経の素晴らしさに仏教者としての優位性が見られるものの、むしろ全体的には俗物的な人物像こそが浮き上がってくる。そうした説話が成立する背景には、すでに見たように彼の実際の和歌自体に、洒脱性を特徴とする遍

昭の亜流とも言える諧謔性や卑俗に近い俗物性があるのだと思うのである。そしてそれが和泉式部との関係をも偏ったものとして伝えることになる元だったのだと思うのである。

4

以上、説話を手がかりに道命の和歌世界を見てきたが、道命の和歌を総体から見直すため、勅撰集入集歌全57首について、部立別に整理する。

後拾遺（16）…春上（1）夏（3―2）秋上（1―1）恋一（5）恋四（2）雑一（3―1）雑四（1―1）
詞　花（9）…春（2―1）夏（1）秋（2―1）恋上（3）雑下（1）
千　載（9）…春下（1―1）夏（1―1）秋上（1―1）秋下（1―1）離別（1―1）哀傷（1）雑上（1）雑中（1―1）俳諧（1―1）
新古今（4）…春上（1―1）離別（1―1）雑中（2―2）
続後撰（1）…雑下（1―1）
続古今（3）…哀傷（2―2）雑下（1―1）
玉　葉（2）…雑三（1―1）雑四（1―1）
続千載（1）…冬（1―1）
続後拾（2）…夏（1―1）雑中（1―1）
風　雅（2）…春上（1―1）冬（1）

新千載（2）…羈旅（1―1）雑中（1―1）
新拾遺（3）…夏（1―1）哀傷（1）雑中（1）
新後拾（1）…春下（1）
新続古（2）…羈旅（1）哀傷（1―1）

右の表で（　）内が歌数だが、棒線下は『道命集』に入っている歌数を示した。全体を見渡すと、部立が多岐に及んでいること、勅撰集のみに入っていて『道命集』に入ってない歌は25首で43・8％になること、などがわかる。後者になお注目すると、傍点線を付した『後拾遺集』と『詞花集』の恋部と雑の一部が目立ち、ここのみで勅撰集独自歌は12首ある。すなわち、この両集の恋歌が勅撰集独自歌の半数に近いということになる。本論文としては、この点に注目したいと考える。つまり、僧侶歌人である道命が勅撰集に恋歌を多く残していることはどのようなことを意味するのかということである。

しかし、その前に『道命集』には恋歌はあるのかないのかを見たいと思う。その点で明白に恋歌と言えるのは、題詠の、

恋

こひしとはみな人いへどわが身にはいまはじめたる心地こそすれ（一五九）

のみである。他は部立がないから内容で推測するしかない。例えば、恋歌で多く用いられる「かたらふ」を含むものがある。

あひかたらふ人に

①われればかりあひおもふことはかたくとも思ふ人をばおもひしらなむ（二）

かたらふ人の、たえてとしごろありて、たれをかいまはかたらふなどいひおこせたれば

②とふ人もいまはなしわがみわの山すぎにしかたをあはれとぞ思ふ（一三一）

かたらはむなどいふ人にいかにいひやらんなどいふ人にとらす

③おもふらん心もしらでかぎりなきおぼつかなさにまくるたまづさ（二七五）

返し

かきやらんとおもふこころはありながらなはしろ水のしばしよどむぞ（二七六）

①は、付き合っている相手に、自分と同じだけ思うことは無理でも、私があなたを思っていることは知っていてほしい、と送ったもの。②は昔親しかった者が、近況を尋ねてきたので、今つきあっている相手はなく、昔ばかりが恋しいと答えた。③は、付き合いを望まれた人から道命が相談を受けての代作。相談を持ちかけたのは女かもしれない。「おもふらん……」の和歌で「まくる」の意が不明。仮に次の西行歌での「か（懸）くる」の誤写と考えた。

霧上雁

空いろのこなたをうらにたつ霧のおもてに雁のかくるたまづさ　（山家集・四二四）

道命の歌は、「あなたがどのように思っているかも知らず、自分の限りない気がかりから手紙を書いて送ります」との内

容で、返歌は「私も書いて送る気持ちはあるのですが、ぐずぐずしているのですよ」との内容。道命は相談してきた人物の代作をし、返歌は相談してきた者とも、「かたらはむ」と言った人物とも考え得る。[5]

人のもとより、ひさしうたいめんすまじきよしなどいひたりしに

④あふことはかたかるべしとききしかどくだけてわれは物をこそおもへ（三七）

④は、対面を断られた道命の辛さを訴えた内容。下句は名歌、

かぜをいたみいはうつなみのおのれのみくだけてものをおもふころかな

（重之集・三〇三・百首歌 恋、詞花集・恋上・二一一）

に倣ったもので、重之歌の恋心に重なる内容と見た。他には以下のようなものが挙げられる。

人の、うたおほうよみておこせたりし返し

⑤これはみつえこそしられねわがこひはかきつくすべきかたしなければ（九四）

人のもとにやる

⑥秋風のうちふくごとにをぎのはのうごきあゆだにきみぞこひしき（一三四）

かへし

秋風はふきすぎてのみゆくおとををぎのした葉はうらみこそすれ（一三五）

又人に

⑦わするなよわするときかばみくまののうらのはまゆふうらみかさねん（九一）

侍るところにおひたるしのぶぐさを、ふみにさすとて人のとるをみて

⑧いづかたにゆかむとすらんしのぶぐさふりにしやどのつまをわするな（七九）

⑤から⑧は、歌の中に「こひ」「うらみ」「つま」を含むので挙げた。最後に一首を挙げる。

よりふして花をみるとて

⑨あやしくも花のあたりにふせるかなをらばとがむる人やあるとて（一七二）

⑨は、美しい花に寄せての思いを詠んでいるが、棒線箇所の表現が恋人に対するように生々しい。前掲の遍昭歌「…藤のはなはひまつはれよ…」に近い諧謔性があり、好色性との接点を示す歌のように思われて掲げた。

これらのうち、冒頭の題詠と③の代作歌を除けば、どれも道命の思いを人に伝えるために送った和歌である。その関係は様々に考えられる。同性または異性の親しい友人もあれば、友人ではない儀礼的関係もあり、そうした場合でも恋歌的装いをするという場合もあるのかもしれない。あるいはそうした表現も彼の諧謔性の現れとみるべきかもしれない。また、彼は俗人ではない僧侶歌人だが、そのことはこうした恋歌に関わらないのだろうか。次節では、勅撰集での恋の和歌について、僧侶歌人全体から道命の和歌を見直したい。

（未完）

注

（1）

①「傅大納言藤原道綱の妻妾・子女考」上村悦子「日本女子大学紀要」昭和44年3月。
道命の母は嵯峨源氏の源広女。道命の説話、勅撰集入集。和歌は「縁語・掛詞を自由自在に駆使した知巧的かつ洒脱闊達な機智を弄した諧謔の歌が多い。…しかしまた一面自然を観照した歌にしみじみした深い感慨のこめられたものもある」。

②『道命阿闍梨集 本文と総索引』三保サト子編、和泉書院、昭和55年10月。
本文は、『道命阿闍梨集』現存写本から宮内庁書陵部蔵「道命阿闍梨集」（五〇一・一七六）を底本とし、同所蔵「道命法師集」（五〇一・七一〇）で校異を示した。後半は、本文全語彙についての索引。

③「道命阿闍梨の和歌資料についての考察」田中新一「国語国文学報」昭和59年3月。
重出歌への注目から各歌の詠作年次推定及び家集構成などを論ず。

④「道命阿闍梨の伝記的考察」田中新一「国語国文学報」昭和60年3月。
道命の誕生と母について。花山院の出家と近侍。綏子の母対の御方への代作歌。三条院への思い入れ。敦信・定頼・公任・保昌等との関わり。非道綱家的人物。

⑤「道命の歌—道綱母と花山院の存在を通して—」三保サト子「仁愛女子短期大学紀要」昭和61年3月。
道綱母の和歌との類似性。花山院との関わり始発。連歌好み。連歌と花山院周辺歌人。絵に付ける歌。

⑥「道命法師考—飯室妙香院をめぐって—」三保サト子。稲賀敬二編著『源氏物語の内と外』昭和62年11月。
道命の出生と得度受戒。祖父兼家の弟尋禅が師。尋禅の甥とその子息が花山院出家を追う。道命の花山天皇への童殿上は道綱父子の栄達の布石。尋禅が花山天皇の剃髪入道の師。花山院・義懐・その息成房・惟成のその後。道命、総持寺阿闍梨となる。

⑦「法輪寺の道命阿闍梨」三保サト子「島根女子短期大学紀要」昭和63年3月。
中年期の道命。法輪寺在住。尚侍綏子の死。道綱家歌合に和泉式部とともに参加。花山院との繋がり。赤染衛門・公任との関わり。

⑧「説話集の「道命」」山下正治「立正大学国語国文」平成5年3月。
『法華験記』『今昔物語集』『古事談』『宇治拾遺物語』『雑談集』での道命に関する説話の差を論じる。まじめな法華持経者が、『古事談』以後、好色僧・破戒僧とされた。

⑨「道命阿闍梨伝考―晩年の軌跡―」三保サト子。稲賀敬二編著『論考 平安王朝の文学―一条朝の前と後』平成10年11月。
道命の伝記的考察後編。寛弘七（一〇一〇）年妹の死（家集・一四三）。長和五（一〇一七）年の天王寺別当着任。三条天皇・敦明親王・中宮妍子への関わり。定頼・頼宗との交友。

⑩「『道命阿闍梨集』注釈（一）～（六）」柏木由夫「大妻女子大学紀要―文系―」平成23年3月～28年3月。
「冷泉家時雨亭文庫蔵承空自筆本」を底本とし、「宮内庁書陵部蔵「道命阿闍梨集」（五〇一・一七六）」、「宮内庁書陵部蔵「道命法師集」（五〇一・七一〇）」、「京都女子大学図書館蔵旧谷山茂氏蔵（伝岩崎美隆旧蔵）」の校異を示し、全注釈を試みている。

（2）『新潮古典集成 古今著聞集』（西尾光一・小林保治校注）頭注参照。

（3）「僧正遍照」川村晃生「芸文研究」昭和55年12月。
遍昭の和歌を、「古代性」「俗語的（口語的）表現」「洒脱性・即興性」「仏教的詠歌」に分けて論じた。

（4）拙稿「『道命阿闍梨集』注釈（四）」の語訳。「○あゆぶ―「歩む」に同じとされる（日本国語大辞典）。和歌の例は僅少…紛らわしい語に、「あゆく」がある。…諸注釈は「あゆく」を「動く、揺れる」と訳す。…違うのか、同じなのか。同じと見て、「あゆぶ」にも「（風に）揺れる」意があると解す。」

（5）『山家集』には、別に次の例もあり、「つくる」の誤写も可能性としてはありうる。
売人に付文恋と云ふ事を
おもひかねいちのなかには人おほみゆかりたづねてつくるたまづさ（六一〇）

（付記）本稿の続稿は、大妻女子大学『人間生活文化研究』に掲載予定。